



関西大学

大阪都市遺産研究センター

Newsletter

No. 4 2011 年 7 月 31 日

目次

国際シンポジウム「再び「豊臣期大坂図屏風」を読む—人物・意匠・城郭・生業・年中行事—」	1
平成 23 年度第 1 回研究例会	2
第 2 回大阪都市遺産フォーラム「道頓堀五座の風景」	3
大学コンソーシアム大阪「大阪の都市遺産」講座開講	4
大阪の地図に関する調査	4
三菱財団人文科学研究助成に採択	4

国際シンポジウム「再び「豊臣期大坂図屏風」を読む

—人物・意匠・城郭・生業・年中行事—

平成 23 年 7 月 16 日(土)、国際シンポジウム「再び「豊臣期大坂図屏風」を読む—人物・意匠・城郭・生業・年中行事—」を開催した。都市「大阪」のルーツは、豊臣秀吉が大坂城を建設した時期に求められる。平成 18 年にオーストリアのエッゲンベルク城（世界遺産）で発見された「豊臣期大坂図屏風」は、豊臣期の大阪を描いた数少ない作例である。本シンポジウムでは、屏風絵に描かれた大坂城とその城下、人物・意匠・生業・年中行事などについて、各分野のスペシャリストが集まり、議論を展開した。来場者は 298 名であった。

基調講演は、狩野博幸氏（同志社大学教授）とマシュー・マッケルウェイ氏（コロンビア大学准教授）が行った。

狩野氏の講演は、平成 21 年に新潟県上越市で新発見された「御所参内・聚楽第行幸図屏風」に関するものであった。天正 16 年（1588）、後陽成天皇が聚楽第へ行幸するということがあった。豊臣秀吉という個人に対して行幸が行われることは歴史上極めて稀な例であるが、これを絵画に描いた作例は過去に三井記念美術館本と堺市博物館本の 2 例しかなく、そのため、これまで日本史上での注目度は、事態の大きさに比して低かったといえる。この点で新出の「御所参内・聚楽第行幸図屏風」の歴史的価値は非常に高いものがある。狩野氏は、文献

に見られる行幸の様子や聚楽第の結構について説明し、それにあわせて「御所参内・聚楽第行幸図屏風」の細部を紹介した。

マッケルウェイ氏は「最大の洛中洛外図—新出八曲本と《京・大坂図屏風》との関連—」というタイトルで講演を行った。これは平成 22 年 9 月 25 日から 11 月 7 日まで名古屋市博物館で開催された「名古屋開府 400 年記念特別展 変革のとき 桃山」展で初めて公開された新出「洛中洛外図屏風」に関するものである。この新出「洛中洛外図屏風」は、豊臣秀吉が築いた伏見城が大きく描かれる点に特徴がある。マッケルウェイ氏は、この屏風絵の構図について説明し、「洛中洛外図屏風」研



究の中でこの作品が「第2定型」と呼ばれるジャンルに属することを述べた。この新出「洛中洛外図屏風」は現在8曲1隻の形で残されているが、マッケルウェイ氏は、この屏風には対になるもう1隻があった可能性を示唆した。

パネルディスカッションに入る前に、「豊臣期大坂図屏風」の概要を解説する「屏風案内」が行われた。この「屏風案内」にあたって、本研究センターでは「豊臣期大坂図屏風」デジタルコンテンツを作成した。デジタルコンテンツはFlashを使用して井浦崇氏（関西大学総合情報学部助教/センター研究員）が作成し、コンテンツ内容は内田吉哉（関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員）が解説した。井浦氏がデジタルコンテンツの技術に関する説明をした後、内田がオーストリアでの「豊臣期大坂図屏風」の来歴、この屏風絵を所有してきたエッゲンベルク家の系図、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観について述べた。

パネルディスカッションにあたり、パネラーからプレゼンテーションが行われた。

松尾信裕氏（大阪城天守閣館長）のプレゼンテーションは「発掘された豊臣期大坂城と城下町」というものであった。松尾氏は、大阪市における長年の考古発掘の成果から豊臣期大坂城に関するものを紹介した。発掘した場所は大阪城内と船場城下町地域である。大阪城内の発掘では、本丸の石垣や三の丸の北を限る石垣、大坂城三の丸の西端から出土した金箔瓦や陶磁器を紹介した。船

場城下町の発掘では、惣構の中にあつた武家屋敷跡や大坂冬の陣で火災にあつた道修町の町屋敷等を紹介した。

北川央氏（大阪城天守閣研究主幹/センター研究員）のプレゼンテーションは、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた内容のうち、船場の景観を中心に橋と街路の特定を試みたものであった。「大坂夏の陣図屏風」「大坂冬の陣図屏風」をはじめとして、大坂を描いた他の屏風絵や古地図との比較を踏まえながら、「豊臣期大坂図屏風」の東横堀川にかかる橋や船場に描かれる神社の比定に関する見解を述べた。

木村展子氏（宝塚大学講師）のプレゼンテーションは、豊臣期大坂城にあつたとされる廊下橋形式の極楽橋についてであった。「豊臣期大坂図屏風」に描かれる極楽橋は、楼閣を備えた廊下橋として描かれている。この形式の極楽橋が大坂城に存在したのは慶長元年（1596）から慶長5年（1600）までの5年間で、「豊臣期大坂図屏風」の景観年代を推定する大きな手がかりとなる。極楽橋の遺構と考えられる唐門が竹生島（滋賀県長浜市）の宝蔵寺に残されており、木村氏はこの宝蔵寺唐門を中心として豊臣期大坂城の極楽橋についての見解を述べた。

ディスカッションでは、高橋隆博氏（関西大学文学部教授/センター研究員）をコーディネーターとして議論が交わされた。人物と風俗を中心に、画像を比較しながら、「豊臣期大坂図屏風」および関連する作例について検討をくわえた。

平成23年度 第1回研究例会

平成23年6月23日（木）、平成23年度の第1回研究例会が開催された。この研究例会では、サブテーマA「水都大阪」とサブテーマB「商都大阪」がそれぞれ昨年度の調査・研究成果を報告し、今後の展望を模索した。

長谷洋一氏（関西大学文学部教授/センター研究員）の報告タイトルは「山田伸吉の再評価—関西大学所蔵資料を中心に—」であった。昨年度に山田伸吉の絵画が寄贈されたことを機に、関西大学大阪都市遺産研究センターでは山田伸吉に関する資料を収集し、調査を進めている。長谷氏の報告は、そうした調査をもとに、山田伸吉の経歴を辿り、その人物像の再評価を試みるものであった。なお本研究センターでは、これらの調査・研究成果をもとに、平成24年度に山田伸吉に関連した企画展等を行う予定である。

黒田一充氏（関西大学文学部教授/センター研究員）の報告タイトルは「吹田の文化遺産—副読本による都市

遺産の発信—」であった。これは、本研究センターが制作したDVD映像による小学校対象の副読本教材についての報告である。この小学校副読本教材の制作は、関西大学重点領域研究に採択されたもので、本研究センターの前身にあたる関西大学なにも・大阪文化遺産学研究所（平成17年度～21年度）の時期から制作が進



められてきた。研究助成の期間終了にともない、副読本教材制作に関する報告を行ったものである。

森山雄大氏（関西大学大学院経済学研究科博士課程前期課程）の報告タイトルは「明治・大正期における大阪府の人口推計」であった。都市の発展を研究する上で人口の推移は重要な指標となるものである。しかし明治・

大正期の人口統計資料は無視できないレベルの誤差を含み、そのままでは実態を正確に反映したものと言えない。そこで森山氏の報告は、誤差の要因を詳細に検討し、修正を加えることによって、より実態に近い人口推移の数値を導き出すことを試みるものであった。

第2回大阪都市遺産フォーラム「道頓堀五座の風景」

平成23年7月2日（土）、第2回大阪都市遺産フォーラム「道頓堀五座の風景」が開催された。今回のフォーラムでは、かつて芝居小屋が立ち並び、大阪を代表する「大人の町」であった道頓堀の景観をテーマとした。

高橋隆博氏（関西大学文学部教授/センター研究員）は「道頓堀物語」というタイトルで、近世以来の道頓堀の街並みの変遷について講演した。

高橋氏によると、かつて芝居小屋が立ち並ぶ街だった道頓堀だが、その前は歌舞伎と浄瑠璃が上演されていた。京でおこった歌舞伎がいつ大阪に入ってきたのか判然としないが、18世紀の史料には大坂で歌舞伎が上演された記録があるという。また道頓堀の芝居小屋が5座に固定されたのは近代以降のことで、近世では芝居小屋の数を7座、9座、10座など記す史料もあるとのこと。

高橋氏は、道頓堀の芝居見物に付随する、芝居茶屋や船乗込などについても言及した。ともに大坂市中の堀川と密接に結び付いたものであり、「水の都」大坂を象徴する文化である。

相良真理子氏（関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程）の講演は「道頓堀五座上演の人気作品と近代の情景—CG映像の試作と展望」というものであった。宇田川文海は、明治前期から中期にかけての大阪の新聞・文学界に大きな影響を残した人物である。宇田川文海の作品は、道頓堀五座を中心に大阪各地で芝居として上演された。相良氏の講演は、宇田川文海作品を中心に、1880年代から90年代にかけて、新聞や雑誌に掲載さ

れた作品評や劇評を調査することによって、道頓堀における芝居の上演状況を分析し、またその背後にある時代性にも言及するものであった。

林武文氏（関西大学総合情報学部教授/センター研究員）の講演は「CG映像の試作について」であった。本研究センターでは、大正期の道頓堀を復原した3DCGを制作中だが、林氏は、CGによる可視化の意義として、歴史研究の検証や教育・文化活動への貢献等があるとした。またCGの制作過程を紹介しながら、今後さらにクオリティを高めていく上での問題点を説明した。CGを制作するための資料として地図や写真、絵画のほか、建物の材質を再現するための調査も必要になるとのことである。課題として今回紹介した試作CGには人物や町のにぎわいが再現されていない点をあげたが、人物の表現はCGでは技術的に難易度の高い分野とのことである。

橋寺知子氏（関西大学環境都市工学部准教授/センター研究員）の講演は「明治・大正の道頓堀」であった。明治・大正期の道頓堀について、地図から読み取れる情報を、写真や絵画等と比較しつつ検証するものであった。橋寺氏によると、明治から大正にかけての実測図を調査した限りでは、街路そのものに大きな変化はみられないものの、道頓堀の南の方では新規な街区開発によって地番の変化などがみられるとのことである。他にも写真や当時の絵画を史料として使用するために、建物やその周囲にある看板などの情報から年代・場所などを比定する手法などを紹介した。



大学コンソーシアム大阪「大阪の都市遺産」講座開講

本研究センターは、特定非営利活動法人「大学コンソーシアム大阪」が大学間連携事業として展開するセンター科目「大阪学」に、「大阪の都市遺産」という名称の講座を開講した。

大学コンソーシアム大阪とは大阪府内とその周辺の大学の相互連携を目的としたNPO法人で、地域連携・産官学連携・国際交流などの活動を行っている。その中に大学間連携事業として単位互換制度があり、大阪府下

36の大学が「単位互換に関する包括協定」を結んでいる。

本研究センターが開講する「大阪の都市遺産」講座は、センター研究員と特別任用研究員で計15回の講義をおこなうものである。「大阪の都市遺産」をキーワードに歴史、文学、建築、情報工学の各分野にわたって、リレー講義形式で実施される。受講者は単位互換制度に参加している大学の学生のほか、社会人受講生も受け入れている。

大阪の地図に関する調査

本研究センターでは、大阪の都市遺産に関する研究成果を、CGを用いて可視化する試みを行っている。そのうちの一つに、地図上に都市遺産情報を投影する2次元CGの制作がある。

本研究センターでは、明治期以降の大阪の変遷を5つの画期に分け、それぞれ5つの時代の地図をCG化する。5つの区分は、もっとも古い時期を、①大阪で初めて近代的測量によって地図が作成された明治18年(1885)に置き、続いて②淀川の改修工事が行われた明治末期、③市電が整備され、道路の拡幅が行われた大正末期、④御堂筋の拡幅が行われた昭和10年代、⑤戦後

とした。地図の縮尺は2万分の1とし、また地図を作成する範囲は、大阪市全域をほぼカバーするものとした。

地図をスキャニングして画像データとしたのち、Adobe社のIllustratorを用いて道路・河川・街区などをトレースする作業を行っている。作業にあたっては1枚の地図ごとに25区画に細分化して進めている。

デジタル化した地図データ上に投影する情報として、さしあたり住宅地や工場用地などの土地利用の変遷データ、人口推移のデータ等が考えられる。また当時の写真等をリンクさせて表示することも考えられる。

三菱財団人文科学研究助成に採択

本研究センターでは、エッゲンベルク城(オーストリア・世界遺産)が所蔵する「豊臣期大坂図屏風」の研究を行なっている。その一つとして「豊臣期大坂図屏風」デジタルアーカイブの作成がある。

これに関して、このたび第40回三菱財団人文科学研究助成を受けることが決定した。研究テーマは「新発見「豊臣期大坂図屏風」を中心としてそれに関連する作品群のアーカイブ化」で、助成を受ける期間は平成23年10月より平成25年3月までの18か月間である。

この助成を受ける期間の調査・研究計画として、①関

連する諸作例の調査、②極楽橋の復原的研究、③この屏風がオーストリアへ渡ったルートの解明、④屏風絵に描かれた年中行事・建物・人物・職業等を抽出し、アーカイブ化をはかることを予定している。制作年代や景観年代の特定、また表現・描写において関連性が想定される「洛中洛外図屏風」諸本との図像学的比較研究、あるいは屏風がヨーロッパに渡った時期と経緯、こうした解明は今後の大きな課題となっている。本研究は、この新出屏風に関する歴史学および絵画史、風俗史、民俗学、建築史などにわたる総合研究を行なうものである。

関西大学大阪都市遺産研究センター Newsletter No. 4 2011年7月31日発行

発行・編集 関西大学大阪都市遺産研究センター

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35 関西大学博物館内

TEL 06-6368-0095 FAX 06-6368-0092

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/osaka-toshi/>

mail osaka-toshi@ml.kandai.jp

